

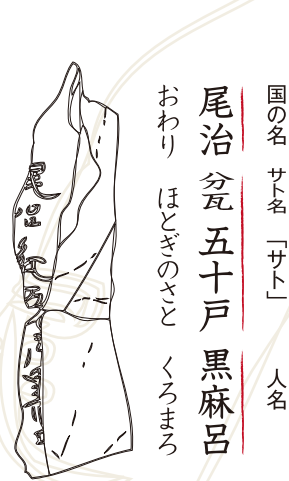
はじめに 長久手市は平成24年度に丁子田1号窯・市ケ洞1号窯出土刻銘須恵器10点を市指定文化財としました。(下記の写真10点)これらが出土した窯の発掘調査から、古代長久手で作られた須恵器が当時の都、飛鳥へ運ばれたと考えられています。

## 大発見を知る ほとぎのさと 盆五十戸

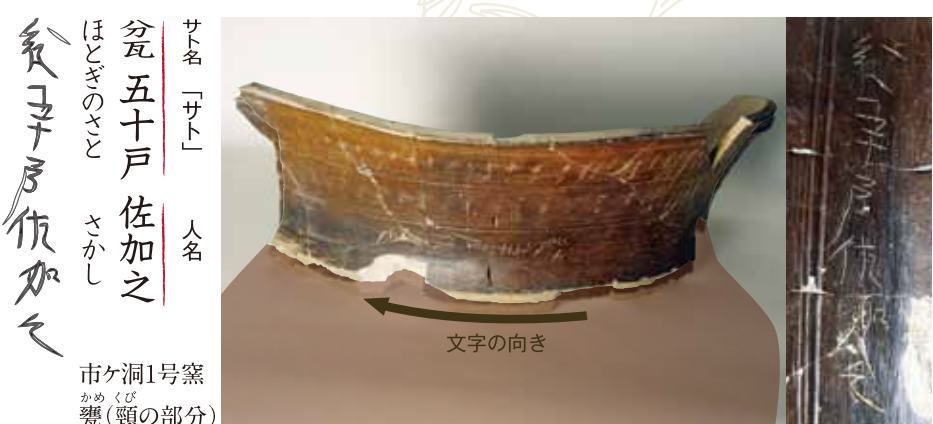
刻銘須恵器の出土により、世紀の大発見

丁子田1号窯、市ケ洞1号窯からは「盆」「盆五十戸」と刻まれた須恵器が複数出土しました。「五十戸」は「サト」と読み、「里・郷」の古い表記になります。古代律令制度で50戸を1つの集落として数えたため、サト名は地名にあたります。隣接する名古屋市長久手区猪高町上社井堀からも「盆」と刻まれた陶片が出土しており、この辺り一帯が「盆」というサトだったと考えられています。

※1 須恵器は、約1100度の高温で焼かれるため硬く焼き締り、それまでの土器に比べて水漏れしにくい丈夫な器。酒や水などを貯蔵する甕や瓶などに用いられることが多かった。



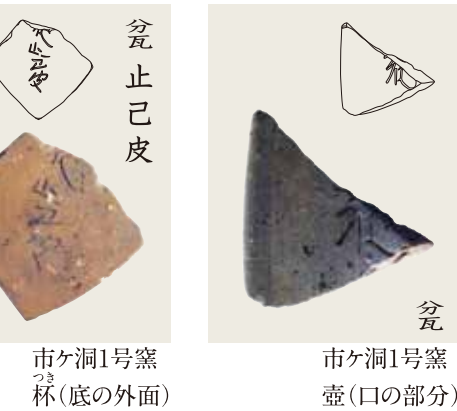
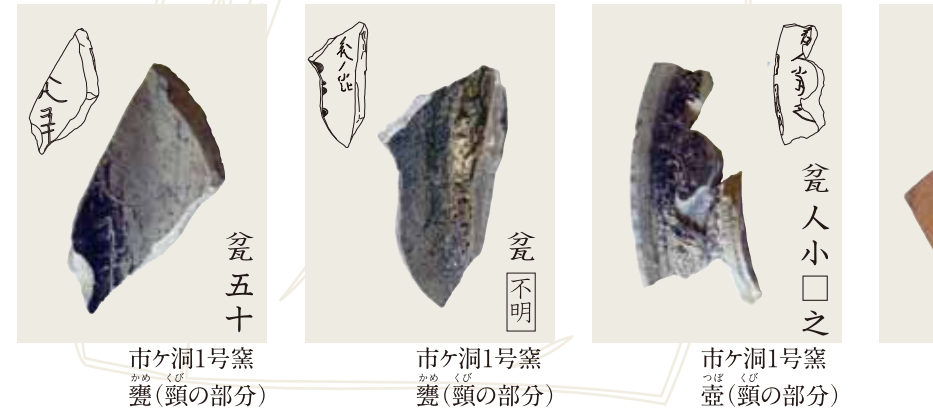
丁子田1号窯 甕片



市ケ洞1号窯 すり鉢(底の外側)



丁子田1号窯 甕(頸の部分)



## 過去を知る



平成6年航空写真 昭和56年根嶽・市ケ洞風景(表紙に使用)

## ほとぎのさととは焼き物作りの里

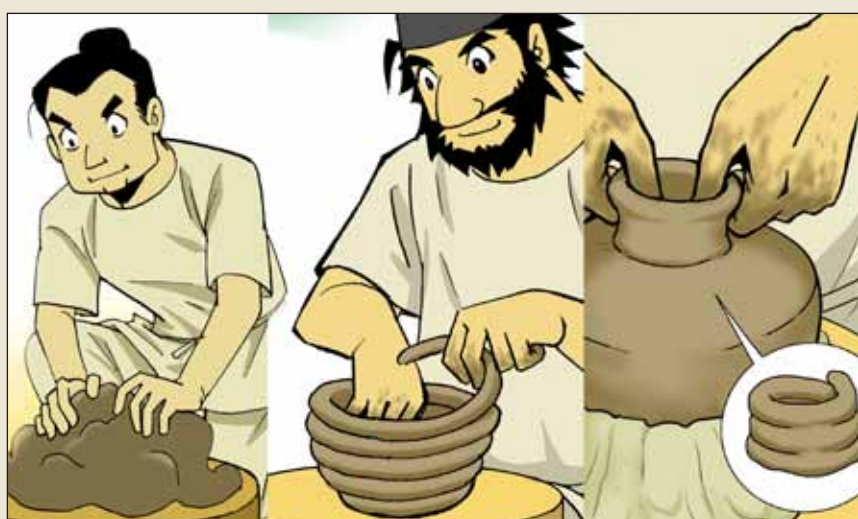
古代律令制度では、現在の長久手市から瀬戸市・名古屋市守山区・名東区・日進市あたりまでを「山田郡」と呼んでいました。「ほとぎのさと」があったのはおそらく山田郡西部。土をこね、ろくろでさまざまな器に成形し、窯の火で焼く。都への貢納品作りこそしむ焼き物作りを産業とする工人集団の里があったと考えられます。



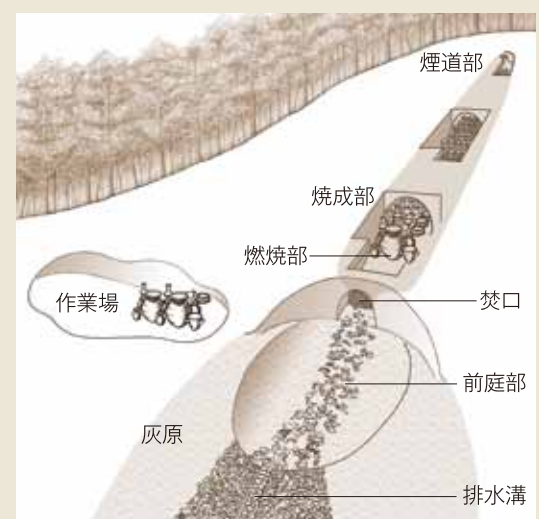
丁子田1号窯 円面碗 市ケ洞1号窯 鉄鉢



丁子田1号窯跡全景



焼き物を作っているところ



操業想像図

## 都との繋がり 古代のつながりを示す刻銘須恵器

奈良県明日香村の石神遺跡は、飛鳥浄御原宮のやや北にあり、朝廷の迎賓館や役所として使われていた施設です。ここで出土した「盆五十戸」の刻銘のある壺。丁子田1号窯と市ケ洞1号窯の発掘によって、同じ「盆五十戸」の刻銘須恵器が出土したことで、長久手の窯で焼かれた須恵器が当時の都、飛鳥へ運ばれていたと考えられています。



石神遺跡出土 底にほとぎの文字 写真提供: 奈良文化財研究所



古代飛鳥の復元模型(石神遺跡・手前は水落遺跡漏刻台) 写真提供: 奈良文化財研究所



石神遺跡の位置図 図版提供: 奈良文化財研究所

## 遺跡からの出土品を調査して飛鳥の都と長久手の繋がりが解ってきた。

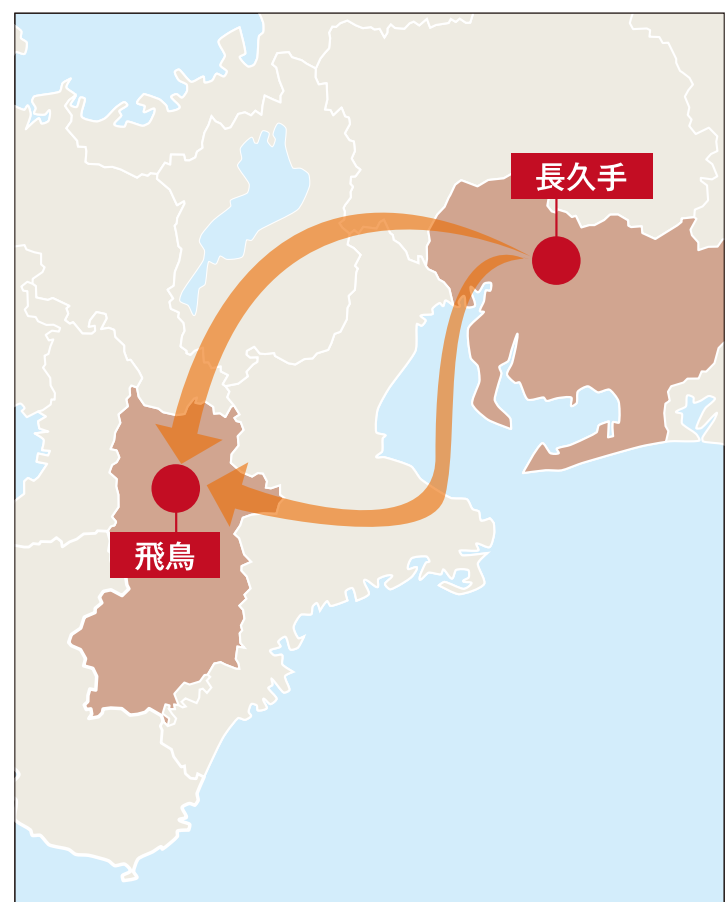
### 飛鳥の都までの流通経路は?

7世紀後半は古墳時代から律令国家へと変化していく時代で、朝廷への貢納品として日本全国の様々な品が納められていました。

長久手の窯で焼いた須恵器を、はるばる飛鳥まで運ぶには、どのような経路をたどったのでしょうか。一説には、川を下るなどして熱田の辺りから海へ出て伊勢側に渡り、陸路を飛鳥まで運んだと言われています。



運搬イメージ図



伊勢湾周辺図